

平成29年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」成果報告書

団体名	三重県教育委員会
-----	----------

## I 概要

### 1 事業の概要

#### (1) モデル校での実践

特別支援学校3校と近隣の小中学校4校をモデル校に指定し、障がいのある児童生徒と障がいのない児童生徒が、障がい者スポーツを通じて体を動かすことの楽しさとともに、一緒に活動する喜びを感じるにより、交流を深め豊かな社会性を身に着けることを目指して、交流及び共同学習(学校間交流)を実施する。

#### (2) 障がい者スポーツ普及のための環境整備

障がい者スポーツを普及するため、用具等の環境整備を進めるとともに、実技講習会の開催や指導者の派遣などをおして指導できる教員の育成を図る。

#### (3) 成果の普及

特別支援教育研究実践報告会を開催し、モデル校での取組を他の特別支援学校や小中学校等に周知するとともに、障がい者スポーツ体験会の開催やホームページを活用した紹介等を通じて、地域の人に対して障がい者スポーツや障がい者についての理解啓発を図る。

### 2 事業の成果

#### (1) モデル校での取組

##### ① 特別支援学校西日野にじ学園・四日市市立笹川中学校

交流及び共同学習の内容は、中学校1年生では対面式、2年生では障害物競走、3年生では少人数グループでの活動というように、3年間を見通し段階的な計画を立て実施することができた。特に、1年生に対しては、西日野にじ学園の教員が交流及び共同学習を実施する前に、障がいの理解や学校紹介の出前授業を相手校へ行うことで、両校の生徒が最初に出会う対面式を円滑に進めることができた。また、両校の教員がそれぞれの生徒の様子や交流及び共同学習の内容等について意見交換をする研修会を設け、共通理解を図った。ポッチャの取組では、事前に西日野にじ学園の教員を対象にした講習会を実施し、ルール等を確認した。その後、交流相手校教員との研修会を持ち、ポッチャの競技方法やルールについて共通理解を図ったうえで、1年生の2学期に交流及び共同学習を実施した。生徒は、ルールを学びながら交互にボールを投げ合うなど、楽しみながら交流を進めることができた。

## ②盲学校・津市立南郊中学校

交流及び共同学習に内容として、盲学校が体育の授業で取り組んでいるフロアバレーボールを行うこととし、まず中学生がアイシェードを着用して体験する取組を行った。ボールの音、気配を感じながらプレイすることの難しさを体感したことで、盲学校の生徒への理解を深めるきっかけとすることができた。

この後、参加した中学生が、フロアバレーボールの面白さを自校で伝えたところ、他学年の生徒からも行いたいとの声があがったことが契機となって、再度フロアバレーボールを通じた交流及び共同学習を実施することになり、両校の生徒が主体的に活動し、互いに関わり合うことができた。その様子は、両校の学年通信等に掲載され、校内での理解啓発につなげることができた。

また、夏季休業中に盲学校で障がい者スポーツ体験会を開催したところ、南郊中の生徒からも参加があり、円周走やフロアバレーボールを体験したことによって、視覚障がい者スポーツへの関心をさらに高めることができた。

## ③特別支援学校東紀州くろしお学園・熊野市立有馬小学校、金山小学校

以前より東紀州くろしお学園が取り組んできたボッチャを交流及び共同学習に取り入れ、同校高等部生徒が競技説明と審判・進行を担当することにより、授業の中で競技を主体的に運営することができた。試合では、小学部と小学校の児童がチーム内で声をかけ合いランプ（ボールを転がす器具）の向きを一緒に調節したり、休憩時間に作戦を考えたりするなど自然に関わり合う姿がみられた。また高等部の生徒と小学校の児童との異年齢間の交流及び共同学習も進めることができた。

ボッチャは、ルールが簡単で誰もが参加でき、障がいの有無に関わらず楽しめる競技であることから、両校の児童の「もっとやってみたい」という意欲を引き出し、今後の交流及び共同学習の展開につなげることができた。

### (2) 障がい者スポーツ普及のための環境整備

#### ①用具等の整備

ボッチャ、フライングディスク、ジャベリックスロー、サウンドテーブルテニス等の用具等をモデル校それぞれの状況に応じて配備したことで、特別支援学校を地域の障がい者スポーツの拠点とするための基盤作りの第一歩とすることができた。

#### ②指導者等の育成と児童生徒の体験機会の拡大

特別支援学校の教職員向け実技講習会を開催し、スラローム、ボッチャ、ゴールボールの3種目を実際に体験することで、ルールを理解し、審判としてゲームを進行する方法を学ぶ機会とすることができた。

また、障がい者スポーツの普及を目的に、障がい者スポーツ指導員が特別支援学校を訪問し、高等部の生徒を対象とした障がい者スポーツ体験会を実施することによって、

ボッチャ、フライングディスク等を紹介し、生徒が実際に体験する場を設けた。体験によって多くの生徒は障がい者スポーツの楽しさを実感することにつながり、体験した種目を学校間交流に積極的に取り入れた学校もあった。

### ③特別支援学校ボッチャ交流試合の開催

障がい者スポーツの中で特にボッチャについては、1月に特別支援学校ボッチャ交流試合を開催し、6校から20チーム71名の生徒が参加した。体育の授業等で取り組んできた成果を発揮し、互いの技能を競い合うことができた。

#### (3) 成果の普及

2月に特別支援教育研究実践報告会を開催し、障がい者スポーツがお互いの理解を深める手だてとして有効であることを県内の小中学校や特別支援学校の教員に周知した。

また、保護者や地域の人に対して、交流及び共同学習や体験会の様子を学校通信やホームページで紹介することで理解啓発を図った。

## 3 事業の課題とその解決のために必要な取組

障がい者スポーツを普及する環境整備については、引き続き、スポーツ用具を計画的に配備し、取り組みやすい環境作りを進めるとともに、各種目を児童生徒に指導できる教員の育成、児童生徒への実技講習を図る必要がある。

また特別支援学校における障がい者スポーツを取り入れた交流及び共同学習については、取組を通して相互の理解が深まるよう、適切な種目の選定、効果的な授業の展開や取組の評価方法、学校間同士の十分かつ効率的な打合せ等について引き続き検討する必要がある。

西日野にじ学園・笹川中学校の交流及び共同学習では、中学生からの「あまりうまく話しかけられなかった」「身ぶりで伝えればもっと伝わったのではないか」といった気づきの声が報告されており、事後学習での振り返りを次年度の事前学習に丁寧に引き継ぐ必要がある。

盲学校・南郊中学校の交流及び共同学習では、中学生の気づきとして、「相手との距離が近くなれば色々なことを自分のこととして考えることができるのでは」という意見が複数あった。これらの気づきを交流場面だけでなく、人権学習や日々の学校生活にどのように生かしていくかが課題である。

東紀州くろしお学園・有馬小学校・金山小学校の交流及び共同学習では、互いの学校において、交流及び共同学習のねらい、持ち方及び当日の進め方について検討する必要がある。

県教育委員会では、引き続き、障がい者に対する理解を促進するため、関係機関や障がい者スポーツ団体等の協力を得ながら、障がい者スポーツを取り入れた交流及び共同学習を推進していくとともに、効果的な実践事例を蓄積し、県内に発信する場を設けるなどして、取組の普及促進を図りたい。